



Title	＜翻訳＞リマ・バレット「ジャワ語がわかる男」
Author(s)	リマ・バレット; 平田, 恵津子
Citation	ブラジル研究. 2010, 6, p. 85-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106521
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

リマ・バレット

「ジャワ語がわかる男」

平田 恵津子訳

はじめに

本稿はブラジル人作家、アフォンソ・エンリケス・デ・リマ・バレット (Afonso Henriques de Lima Barreto, 1881-1922)、略してリマ・バレットの代表的短篇小説「ジャワ語がわかる男」(“O homem que sabia javanês”)¹を訳したものである。

今日、リマ・バレットはブラジル文学史上もっとも重要な作家のひとりに数えられ、その主な作品はブラジル文学の「^{正典}キャノン」になっている。しかし、1888年までおよそ3世紀にわたって奴隷制を維持し続けたブラジルに貧しいムラート（白人と黒人の混血）として生まれたバレットは、その生涯をとおして差別と偏見に苦しめられ、作家、ジャーナリストとして精力的な創作活動を行なったものの、生前、十分な評価を得られなかった。

バレットの作品世界はそのような作家の生涯を色濃く反映したものである。その主な舞台は、彼が生まれ育った場所であると同時に、当時ブラジルの首

都であったリオ・デ・ジャネイロで、そこにはびこる政治的・社会的不正と腐敗、権威主義と官僚主義、経済格差と道德の廃退などを、時には作家の強い憤りを感じさせる筆致で描き出した。ブラジルの社会的現実をかえりみることなく、言語表現の芸術性のみを追求していた当時の文壇において、バレットの作品は異質で、そのことも生前バレットが認められなかった理由のひとつ、あるいは、最大の理由であったと言えよう。

ここで訳出する「ジャワ語がわかる男」は、1911年4月20日、リオ・デ・ジャネイロの『ガゼッタ・ダ・タルデ』紙に発表されたものである。その批判精神と差別的社会に対する憤りの強さがしばしば文学作品としての芸術性を危うくすることもあるバレットの作品のなかで、両者の均衡がとれた佳作として評価されている作品のひとつとなっている²。

本篇を含め、バレット作品に関する詳しい分析は稿をあらためて行なうこととして、この作品の結びに、非常に重要な意味を含みながらも、日本語に訳してしまうと、わかりにくくなる部分があるので、その点について解説を加えておきたい。語り手であるカステロが領事として派遣されたハヴァナは、言うまでもなくスペイン語圏の国キューバの首都であり、ジャワ語とはまったく関係のない場所である。バレットは、ポルトガル語で「ジャワ語」を意味する「javanês」と「ハヴァナの（人）」を意味する「havanês」の音が類似していることに引っ掛けて、ブラジルの外交官の無知と愚かさを痛烈に皮肉っているのである。

「ジャワ語がわかる男」

試訳³

いつだか、ある喫茶店で、私は友人のカストロに、生きていくために、人の信用と尊敬をあやつった経験について語っていた。

たとえばマナウスにいた頃、私のまじないと占いを求めてやって来てい

た客からより一層の信頼を得るために、私が実は法律を修めていることを隠さざるを得ないこともあった。そのようなことを話したのである。

友人は、まるで生きたジル・プラス⁴のような私の体験談をおもしろがり、何も言わず、夢中になって聞いていたが、話が途切れ、私たちがグラスを飲みほしたところで、何気なく口にした。

「なかなか面白い人生を送ってきたんだね、カステロ！」

「それでこそ生きていけるってものさ…たったひとつの仕事について、決まった時間に家を出て、決まった時間に家へ帰ってくるなんて、うんざりだ。そう思わないかい？自分が今までどうやって領事館で辛抱してきたのか不思議だよ」

「そりゃあ退屈さ。でも、そんなことには驚かない。僕が驚いているのは、この愚かで官僚的なブラジルで、君がそんなにたくさんの冒険をしてきたってことさ」

「ああ！ここでだって、人生の美しいページを描くことが出来るんだよ、カストロ。君は僕がジャワ語の先生をしたこともあるって想像できるかい？」

「いつ？領事館から戻って来てからのことか？」

「いや、もっと前だ。そもそも、それがきっかけで領事に任命されたのさ」

「話してくれよ。もっと飲むかい？」

「ああ」

私たちはビールをもう1本注文し、グラスに満たした。それから、私は話を続けた。

「リオに着いたばかりの頃、僕は文字どおりの素寒貧だった。下宿から下宿へと逃げ回って、どこでどう稼げばいいのかわからないでいた時、ジョルナル・デ・コメルシオ『商業新聞』でこんな広告を見つけたんだ。

【ジャワ語教師求む。紹介状、云々】さあ、これはあまり応募者がいなさそうな仕事だ、四つほど単語をかじったら申し込もうと考えた。カフェを出て、通りを歩きながら、ジャワ語教師になって金を稼ぎ、市電で出かけ、借金取りに煩わされずにすむ自分の姿をずっと想像していた。無意識に国立図

書館へ向かっていた。どの本を申し込めばいいかわからなかったが、中に入り、帽子を係りに預け、利用者カードをもらって、階段をのぼった。階段の途中で、ジャワとジャワ語について調べるために、『百科大事典』の「J」の項を申し込もうと思いついた。即、実行したよ。数分後には、ジャワはスンダ諸島のなかの大きな島で、オランダの植民地で、ジャワ語はマレー・ポリネシア語系の膠着語で、インドの古いアルファベットをもとにした文字で書かれた注目に値する文学をもつことを理解していた。

『百科大事典』にはそのマレー語とやらに関する文献のタイトルがいくつか記載されていたので、僕は迷わずそのうちの1冊を調べてみた。アルファベットとその発音記号を書き写して、そこを出た。そして、ぶつぶつとそのことばをつぶやきながら、あてもなく通りをさまよった。

頭の中では象形文字が躍っていた。時おりメモで確認し、それらをしっかりと記憶に焼きつけて、書き方を手に慣れさせようと、公園に入っては、子供が描く人の絵みたいな字を砂の上に書いた。

管理人のあのぶしつけな質問を避けるため、夜になって、誰にも見とがめられずに家に入ると、自分の部屋でマレー語の「abc」をむさぼり続けた。あまり熱心にやったものだから、朝にはそれを完全に理解していた。

これは世界でもっとも簡単な言語だなと納得して出かけた。だが、それは管理人に出くわして家賃の催促をされずにすむほど早い時間ではなかった。

＜カストロさん、いつ頃支払っていただけるんでしょうか？＞

そこで僕はこの上なく魅力的な願いを込めながら答えた。

＜すぐに…もうちょっと待ってくれ…もうちょっとだけ…ジャワ語教師として雇ってもらうことになっているんだよ、それで…＞

そこで、男は僕の話さをえぎった。

＜一体全体それは何ですか、カステロさん？＞

話題が変わったことに気をよくして、僕は男の愛国心をくすぐった。

＜チモールのあたりで話されている言葉なんだ。どこにあるか知ってるかい？＞

ああ！なんて単純な奴だ！男は僕の借金のことは忘れ、あのポルトガル人特有の強い訛りで言った。

くよくは知りませんが、私たちがマカオの近くに持っている領土だと聞いています。で、あなたはその言葉をお話になるんですか？>

ジャワ語がもたらしてくれたこの幸せな結末に元気づけられて、またあの広告を探してみた。そして見つけた。僕は胸を躍らせて、そのオセアニアの言葉を教える仕事に応募することにした。必要事項を書いて、新聞社に立ち寄り、それを預けた。それから図書館へ戻り、ジャワ語の勉強を続けた。ジャワ語のアルファベットがマレー語教師に唯一必要な知識だと判断したからなのか、それとも、自分が教えようとしていた言語についての文献と文学史のほうに夢中になってしまったからなのかはわからないが、その日は大した上達はしなかった。

二日後、番地はあまりよく覚えていないが、コンデ・デ・ボンフィン通りに、ジャクエカンガ男爵のマヌエル・フェリシアーノ・ソアレス・アルベルナス氏を訪ねるようという手紙を受け取った。その間も僕がマレー語、つまり、問題のジャワ語を勉強していたことは忘れないでくれよ。僕はアルファベットのほかに、数人の作家の名前を知り、「ごきげんいかがですか？」といった質問の仕方や答え方、文法の規則を二つ、三つ学んでいた。これらの知識はすべて20ばかりの単語に尽きるんだけどね。

それより、そこへ行くための交通費400レイスを工面するのに僕がどれだけ苦労したか、君には想像もつかないだろう！信じてくれてかまわないが、ジャワ語を覚える方がよほど楽だ…僕は歩いて行ったよ。汗だくでたどり着くと、男爵の家の前の道に立ち並んだ古いマンゴーの木々が母親のような慈しみで僕を待ち受け、歓迎し、いたわってくれた。それが僕の人生で唯一、自然に好感を持った瞬間だった…

屋敷はとても大きくて、人が住んでいそうにない雰囲気だった。荒れ果てていて、なぜだかわからないが、その荒れ方には貧しさというより、投げやりな感じと生きる疲れがあった。ペンキはもう何年も塗り替えられていない

に違いなかった。壁ははがれ落ち、ひと昔前のくすんだ色の瓦で葺いた屋根のひさしは、劣化しているのか、もしくは手入れが悪い歯のようにあちこち抜け落ちていた。

庭を軽く見わたすと、いがをつけた雑草が復讐に燃えるかのような勢いでカラジュームとベゴニアを追いやってしまっているのが目に入った。だが、^{ハズ}巴豆だけは弱々しい色の葉をつけ生き残っていた。僕はドアをたたいた。なかなか開く気配はなかったが、ようやく綿^{わた}のようなあご髭と髪がその表情に老いと温和さと苦しみを強く印象づけていたひとりの年老いたアフリカ黒人が現われた。

広間はまるで肖像画のギャラリーだった。高い襟をつけた傲慢そうな髭の紳士たちがやけに大きな金色の額縁に収まって並んでおり、髪の毛を真ん中で左右に分け、大きな扇子を持った婦人たちの優しげな横顔はバルーン状のドレスに風をはらませ、いまにも空へ上り立ちそうにしていた。だが、ほこりがアンティークさと尊さをより一層きわだたせていた古びた品物の中で、僕が一番気に入ったのは、中国かインドからやって来たとされる、美しい磁器の壺だった。その磁器の清らかさ、もろさ、デザインの素朴さ、月光のような鈍い輝きは、それが失望している老人たちの疲れた目を喜ばせるために、夢見る子供の手によって作られたものだと言っていた。

僕は家の主人が現われるのを待った。少し時間がかかった。手にハンカチを持ち、威厳を漂わせて昔風の嗅ぎたばこをかきながら、よろよと入って来る主人を見ると僕は尊敬の念でいっぱいになった。そして、その場を去りたい気分には駆られた。たとえ彼が僕の生徒ではなかったとしても、その年齢が厳かで神聖な何かを僕の心の表層に感じさせるような老人をだますなんて、いつの時代にも罪だ。僕はためらった。が、そこに残った。

<私はあなたが求めていらっしゃるジャワ語の教師です> 僕は申し出た。

<座りたまえ> 老人は言った。<君はこのリオの出身なのかね？>

<いいえ、カナヴィエイラです>

<何だって？> 彼は言った。<もう少し大きな声で話してくれ。私は耳が

遠いんだよ>

<パイア州カナヴィエイラの出身です> 僕は繰り返した。

<どこで勉強したのかね？>

<サルヴァドールです>

<ジャワ語はどこで学んだのかね？> 彼はあの老人特有の執拗さで尋ねた。

この質問は予期していなかったが、即座にいい加減な作り話をでっち上げた。僕は彼に、父親がジャワ人であると語った。父は商船の乗組員で、パイアへやって来て、漁師としてカナヴィエイラの近くに住みつき、結婚して、繁栄し、そして、その父から僕はジャワ語を習ったんだと

「それで信じてもらえたのかい？それに、その外見は？」それまで黙って聞いていた友人が尋ねた。

「僕はジャワ人とそんなに変わらないよ」と反論した。「このまっすぐで固くて太い髪の毛と褐色の肌は、僕にマレー人の混血としての特徴を十分に与えてくれている… 君もよく知っているように、僕たちの中にはありとあらゆる人種がいる。インディオ、マレー人、タヒチ人、マラガシ人、グアンチェ人、そしてゴート人さえ。世界中がうらやむ人種とタイプのるつぼさ」

「そうだね。まあ、続けて」友人は言った。

「老人は僕の話を注意深く聞き、僕の外見をじっくり観察し、僕が本当にマレー人の息子だと判断したようだった。そしてやさしく尋ねた。

<では、君は私にジャワ語を教えてくれるかね？>

<もちろんです> 僕は思わず返事をしていた。

<君は私がこんな年になって、まだ何かを習いたがっていることに驚くだろうが…> と、ジャクエカンガ男爵は言いかけた。

<驚いたりしません。これまでもそのような例はありましたし、しかも敬服すべき例ばかりで…>

<私が望むことはね、えっと…>

<カステロです> 僕は自分から名乗った。

＜私が望むことはね、カステロくん、先祖の誓いを守ることなんだ。君は知らないだろうが、私はペドロ1世が譲位した時に付き従ったあのアルベルナス相談役の孫にあたるんだよ。ロンドンから戻った時、祖父は奇妙な言葉で書かれた本を持ち帰ったんだが、それをとても大事にしていた。ロンドンでその本を祖父にくれたのはインド人か、タイ人で、何があったかは知らんが、祖父がした世話への礼だった。祖父は死ぬ時、私の父を呼んでこう言った。《息子よ、ここにジャワ語で書かれた本がある。これを私にくれた人は、本はそれを持つ者の不幸を遠ざけ、幸せをもたらしてくれると言った。確かなことは何もわからん。いずれにせよ、この本をしまっておくのだ。そして、もし東洋の賢人が予言した未来を現実のものにしたければ、わが一族がいつも幸せでいられるよう、お前の息子に伝えるがよい》＞ 老男爵は話し続けた。＜父はその話をあまり信じなかった。それでも、本はしまっておいた。死が近づいた時、父は私にそれを手渡し、自分が父親と約束したことを話して聞かせた。最初、私はその本の話に気にもとめなかった。どこか片隅にしまい込んで自分の人生を築いていった。本のことはすっかり忘れてしまっていたが、ある時期からいやなことばかり起きて、あまりにたくさんの不幸が年老いたこの身に降りかかってくるものだから、わが家のおまもりのことを思い出したんだ。私の晩年が子孫の災難を告げるものにならないために、私はそれを読み、理解しなくてはならない。そしてそれを理解するには、もちろんジャワ語がわからなくてはならんのだ。問題はそこだよ＞

男爵は黙った。僕は老人の目が濡れているのに気づいた。彼は控えめなしぐさでそれをぬぐうと、本が見たいかと尋ねた。僕は見たいと答えた。男爵は召使いを呼び、いくつか指示を与えてから、息子と甥をすべて失い、残ったのは結婚した娘ひとりになってしまい、その血筋をひくのも息子がひとりだけ、しかもその子の体格は悪く、虚弱で、健康状態は不安定だと僕に打ち明けた。

本が運ばれてきた。それは革で装丁された昔の四つ折り版の古書で、厚手の黄色っぽい紙に大きな文字で印刷されていた。扉のページがなかったので、

いつ印刷されたものなのかはわからなかった。だが、英語で書かれた序文が数ページあったので、それがジャワの優れた作家、クランガ王子の物語であることがわかった。

すぐにそのことを知らせると、老男爵は僕がそれを英語で理解したのに気づかず、僕のマレー語の知識を大いに評価した。僕が教師然として、そのさっぱりわけのわからない言葉を熟知しているかのように、ぶ厚い本のページをめくっていたところ、ついに僕たちは謝金と時間について取り決めた。そして僕は、1年以内に男爵がその古書を読めるようにすると約束した。

まもなく1回目の授業を行なったが、老人は僕ほど熱心ではなかった。四つの文字ですら、見分けたり、書いたりできなかった。結局、アルファベットの半分だけで1カ月かかり、ジャクエカンガ男爵はこの教科をほとんどものにすることができなかった。覚えては忘れていた。

娘と娘婿（ふたりはその頃まで本の話について何も聞かされていなかったと思う）は、老人が勉強していることを知っても気にもとめなかった。おもしろがり、また、老人にはいい気晴らしだと考えた。

だがね、カストロ、君が何に驚くかって、ジャワ語教師に対する娘婿の心酔ぶりだよ。何てことだ！彼は飽きることなく繰り返していた。くすばらしい！そんなに若いのに！もし私がその知識を持っていたなら、ああ、今ごろどこにいただろう！>

マリア・ダ・グローリア夫人（それが男爵令嬢の名前だった）の夫は判事で、広い人脈と影響力を持つ男だったが、恥じることなく皆の面前で僕のジャワ語に対する称賛の念をあらわにした。男爵の方とは言えば、すこぶる満足そうだった。2カ月が過ぎたところで、すっかり勉強するのをあきらめてしまい、彼のために僕が1日おきに魔法の本の1節を訳すよう頼んできたのさ。彼はその時、内容が理解できれば十分なんだと言った。ほかの誰かがそれを訳して、自分がそれを聞くことに何の問題があるうか。そうすれば勉強で疲れることもなく、義務を果たすことができるではないかと。

今でもジャワ語がさっぱりなことは君も知ってのとおりだが、僕はひどく

馬鹿げた話をでっちあげては、その古本に書いてあることにして老人に聞かせた。そのくだらない話に耳を傾ける男爵の様子ときたら！…

彼はまるで天使の言葉を聞いているかのようにうっとりしていた。そして僕の存在は彼の眼にますます大きくなっていった。

彼は僕を屋敷に住まわせ、贈り物でいっぱいにし、給料を上げてくれた。要するに、僕は快適な暮らしを送るようになったというわけだ。

この件については、男爵がその存在すら忘れていたポルトガルの親せきの遺産を相続したことが大いに寄与してくれた。お人好しの老人はそれを僕のジャワ語のおかげだと考え、僕もうっかりそれを信じそうになったよ。

僕は良心のとがめを失っていった。いずれにせよ、僕はあのマレーの魔除けを本当に理解できる者が目の前に現われるのではないかといつも恐れていた。そしてその不安は、心やさしい男爵が僕を外交の道へ進ませるため、紹介状を手に、カルルー子爵のところへ行かせた時に大きくなった。僕はあらゆる異議を申し立てた。この醜い容貌、優雅さの欠如、タガル族のような風貌。〈とんでもない！〉彼は反論した。〈行くんだよ。君はジャワ語がわかるんだから！〉僕は出かけた。すると子爵は様々な推薦の言葉でもって僕を外務省へ送り出してくれた。大成功だったよ。

局長は課長たちを呼んだ。「どうだね、これがジャワ語ができる男だ。すごいじゃないか！」

課長たちは、僕を部下と事務員のところへ連れて行っただが、事務員のひとり、嫉妬か感嘆というよりむしろ憎悪を込めて僕を見た。皆、口々に言った。「それじゃあ、君はジャワ語がわかるのか？難しいのかい？ここには誰もわかる者はいないよ」

その時、僕を憎悪の目で見たあの事務員が言葉をはさんだ。「たしかに。でも、私はカナカ語を知っています。あなたはご存知ですか？」僕は知らないと答え、大臣に面会に行った。

高官は立ち上がり、腰に手をあて、鼻眼鏡を押し上げると、僕に尋ねた。〈で、君はジャワ語がわかるのかね？〉僕はそうだと答えた。どこで学んだ

かという質問にはあのジャワ人の父親の話を語って聞かせた。〈なるほど〉と大臣は言った。〈君は外交には向いてないな。外見がいかん… せいぜいアジアかオセアニアの領事だったらいけるかもしれない。今は空きがないが、私が何とか調整しよう。そうすれば君でも大丈夫だ。とりあえず今日からは、私の仕事の補佐をしたまえ。来年はバーゼルへ行き、そこでの言語学学会でブラジルを代表してもらおう。オーヴェラックやマックス・ミュラーなんかを読んで、勉強しておいてくれたまえ！〉

ジャワ語について何もわかつちやいないのに、勤め口ができて、学者の集まりでブラジルを代表するだなんて君に想像できるかい？

老男爵はついに亡くなったが、適当な年齢になったら孫に与えるようにと、あの本を娘婿に譲り、僕にはいくらかの遺産を残してくれた。

僕はマレー・ポリネシア語系の言語を熱心に勉強しはじめたが、どうにもならなかった！

たっぷり食事をとり、りっぱな身なりをし、ぐっすり眠るようになった僕に、あんな奇妙なものを脳みそに覚えさせるだけのエネルギーはなかった。本を買い、雑誌も定期購読した。『Revue Anthropologique et Linguistique』に、『Proceedings of the English-Oceanic Association』に、『Archivio Glottologico Italiano』… なのにさっぱりだった！僕の名声は高まるばかり。町では噂を聞いた人たちが僕を指さして、「ほら、あれがジャワ語を知ってる男だ」と言い合う。本屋では文法学者たちが、スンダ諸島において仲間同士で喋る場合、代名詞はどこに置くのか聞いてくる。地方の学者からは手紙が届き、新聞各社は僕の知識について書きたてる。ジャワ語を習いたいと熱心に言ってきた連中については引き受けるのを断わったよ。『商業新聞』には、編集部に頼まれて、昔と今のジャワ文学について4段組の記事を書いたけど…」

「どうやって？何も知らないのに？」じっと聞いていたカストロが口をはさんだ。

「簡単なことさ。まず、辞書と地理の本数冊の助けを借りてジャワ島について説明して、次に、これ以上できないっていうくらい引用したのさ」

「それで誰も疑わなかったのか？」友人はさらに尋ねた。

「ああ、一度もね。いや、一度だけ危ないことがあったな。警察が船乗りをひとり捕まえたんだ。日に焼けていて、変わった言葉しか話さない男だった。通訳が何人も呼ばれたが、誰にもその男の話すことが理解できなかった。僕も呼び出されたさ。もちろん、僕の学識が値するあらゆる敬意を払ってね。僕はなかなか出かけようとしなかったが、結局は出頭した。男はすでに釈放されていたよ。仲介してくれたオランダ人領事に、わずかばかり知っていたオランダ語の単語で何とか話を通じさせることができたんだ。そいつはジャワ人だったのさ。ふう！

ついに学会の時期がやって来たので、僕はヨーロッパへ出発した。すばらしかった！僕は開会式と準備会議に出席し、トゥピー・グアラニー語部門に入れられるとパリへ逃げ出した。だが、その前に『バーゼルのメッセンジャー』紙に僕の写真と経歴と著作目録を掲載させた。パリから戻ると、学会の会長が僕をトゥピー・グアラニー語部門に入れたことを謝った。僕の研究について知らず、僕が南米のブラジル人だから、その部門がぴったりだろうと判断してしまったと言ってね。僕は弁明を受け入れた。だが、彼に送ると約束したジャワ語に関する論文はいまだに書けていない。

学会が終わって、『バーゼルのメッセンジャー』紙の記事から抜き出したものをベルリンとトリノとパリで掲載したところ、パリでは僕の論文の読者がゴロー上院議員主催の祝賀会を開いてくれた。僕のために開かれたこの宴会を含めたすべての悪ふざけに、僕はおよそ1万フラン、あのお人好しでたまされやすいジャクエカンガ男爵が残してくれた遺産のほとんどすべてを使ってしまった。

時間もお金も無駄にはしなかったよ。僕は国の誉れとなり、リオ・デ・ジャネイロの波止場に降り立った時には、あらゆる社会階級から大きな喝采を浴び、数日後には共和国大統領から昼食に招待されていた。

6か月たたないうちに、僕は領事としてハヴァナへ派遣され、そこで6年間過ごした。そして、マレー語とメラネシア・ポリネシア諸語の研究に磨き

をかけるため、まもなくそこへ戻ることになっている」

「すごいな」ビールのグラスをつかみながらカストロは言った。

「ねえ、もし僕が満足していなかったら、何になっていたかわかるかい？」

「さあね」

「名高い細菌学者さ。どうだい？」

「いいね」

注

¹ “O homem que sabia javanês.” In: *Clara dos Anjos e outras histórias*. Rio de Janeiro: Ediouro, 2002, pp.229-239.

² この作品は、バレットについて最も詳細な伝記を書いたフランシスコ・デ・アシス・バルボーザ (Francisco de Assis Barbosa) が編んだ『リマ・バレットの傑作短篇集』 (*Melhores contos de Lima Barreto*) をはじめ、多くの短篇選集に収められている。

³ 翻訳にあたっては、グレゴリー・Y・ラバッサ (Gregory Y. Rabassa) による英訳を随時、参照した。 (“The man who knew Javanese.” In: *The Oxford book of Latin American short stories*, edited by Roberto González Echevarría. Oxford; New York: Oxford University Press, 1999, pp. 144-152.)

⁴ フランスの作家ル・サージュ (Le Sage, 1668-1747) の小説『ジル・プラス物語』の主人公。スペインのピカレスク小説の流れをくんでいる。